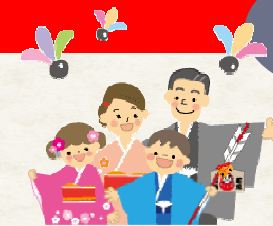


# 正月



## 七草粥(人日の節句)

1月7日には七草粥をいただく習慣があります。これは、おせち料理というご馳走をお腹いっぱいいただいた後、疲れた胃袋をいたわるという意味もありますが、元々はこの日に七草粥をいただくとその年は健康でいられるといわれ、平安時代に中国から日本に伝播したものです。最初は「小松引き(こまつびき)」という行事で、小さい松を引き抜き、春の若菜を摘み、詩歌を歌って楽しみました。「根が伸びる」に「年を伸ばす(長生きする)」、或いは葉を摘むことに「年を摘む(年をとらない)」とかけ、長寿を祝った行事です。それが江戸時代には「五節句」の一つである「七草の節句(人日—じんじつ)」として定められました。

### ※五節句

- 1月7日 七草の節句(人日)
- 3月3日 桃の節句(上巳)
- 5月5日 菖蒲の節句(端午)
- 7月7日 七夕祭り
- 9月9日 菊の節句(重陽)



七草粥に入れるのは春の七草で、「セリ、ナズナ、ゴギョウ(ハハコグサ)、ハコベラ(ハコベ)、ホトケノザ、スズナ(カブ)、スズシロ(ダイコン)」が一般的です。ようやく芽を出した野草の強い生命力にあやかるうとしていたこともあるでしょう。また、野草の種類を「七」としたのも、中国の人日の節句では、1月1日-6日までに獣畜を占い、7日は人を占い、7種類のごちそうをいただきます。この「7日」「7種類」から「七草」になりました。「野菜(おかず)」は数が多くめでたいという意味も含んでいます。

## 鏡餅と鏡開き

鏡餅は年神様へのお供えとして床の間に飾ります。まず三宝(さんぼう—左右に穴があいている供え物の台)に紙を敷いて、その上にウラジロとユズリハを載せます。その上に鏡餅を二段に載せ、更にその上に昆布を長く垂らして敷き、橙(だいだい)や干しスルメなどを置いてできあがりです。ウラジロは常緑の葉であることから長寿を、ユズリハは新しい葉が出てきて初めて古い葉が落ちることから「譲って絶やさぬ」と次世代に家系を引き継ぐ願いを、また橙は家が「代々」栄えるに繋がると縁起物として使われるようになりました。

1月11日には、正月に備えた鏡餅を降ろして鏡を開きます。鏡開きは神霊が刃物を忌み嫌うため、手や小槌などで鏡餅を割り、お雑煮やお汁粉にいただきます。昔は主君と家来たち、或いは主人と従者たち、更には家族も一緒に頂き、親睦を深めるという意味があったようですが、現在はこの行事を見かけることも少なくなりました。ただ一部の武道関係の道場などでは稽古を行った後に鏡餅を雑煮などにして食べる習慣が残っているようです。

## 正月にお勧めの花

### 松・竹・梅

いずれもおめでたいことの象徴として使われる植物です。松は常緑の高木で樹齢が長いことから縁起物とされ、神の降臨を「待つ」木、或いは「祭り」の神樹とされてきました。竹は驚くほど強靱な萌芽力に生長力、清々しい姿に地下茎の豊かな広がり、どれをとっても無限の繁栄の象徴としてめでたい植物とされました。梅は厳寒の中でも豊かな芳香とともに気品ある花を咲かせる植物で、春に最も早く咲く花です。年の初めを迎えるにふさわしい花として梅を大切にしてきました。昔からこれらの生命力溢れる植物に霊威を感じ、あやかるうと正月の祝いに取り入れたのでしょう。



### 千両・万両・オモト・南天など

いずれ寒い冬でも赤い実を付け、大変縁起の良いものと正月の時期には重宝されます。また、南天は「難を転ずる」に通じることからも縁起物とされています。

### オンシジウム、デンファレ、アランダ、オドントグロッサムなどのラン類、スプレーギク、輪ギクなどのキク類

中国ではもともと蘭・竹・菊・梅の4つをその美しさと気品の高さから草木の中の四君子と位置付け、縁起の良いものとしてきました。発色も良く、凜とした雰囲気を持つラン類やキク類は、年神様をお迎えするのに最適なアイテムでしょう。

### スイセン

季節の花であり、生け花などにも良く使われます。また、スイセンはロウバイのような爽やかな香りを放ちます。ヨーロッパでは春を告げる花としても人気があり、日本でも江戸時代から節目を飾る縁起の良い花とされてきました。

その他、ハボタン、グロリオサ、コウヤマキ、ロウバイ、ユキヤナギ、シンビジウム、ツバキ、ランキュラスなど